

石評梅の生涯—石評梅略伝初稿

吉川榮一

はじめに

石評梅という名は、中国現代文学研究者の多くにとってもあまり馴染みのない名前であろう。彼女は謝冰心や黄廬隠らとほぼ同じ時期に創作活動を開始し、当時多くの読者の歓迎を受けていた女流作家である。しかし、その死後いつのまにか人々の口にのぼることも少なくなり、やがて「忘れられた作家」の一人となってしまった。¹⁾彼女が「忘れられた作家」となってしまったのは、一つには若くして世を去ったために生前にはついに作品集が出版されることがなかったためであり、そしていま一つには、不幸なことに遺作集が出版されたときにはすでに彼女の叙情的な作品を受け入れる時代ではなくなってきていたためである。

しかし近年、三巻からなる『石評梅作品集』が出版されるなど、彼女の文業を再評価しようという機運が次第に高まってきた。石評梅を紹介する幾篇もの文章が発表されるようになり、中国現代文学史の中に彼女を正しく位置付けようとする試みが、彼女の死後六十年にして漸く起こってきたのである。²⁾ところが残念なことに、「石評梅伝」と称しうだけのものが中国においてまだ出現していないばかりか、日本においては未だ簡単な紹介すらされていない。五四時期女流作家の一人としての石評梅についての研究は、今後次第に充実してくるであろうが、簡単な紹介すらない国内の今日の研究状況は誠に遺憾と言わざるをえない。石評梅の生涯を跡づけることは、所謂「五四時期」の知識青年の歩みを研究する上でも我々に様々な示唆を与えてくれるに相違ないからである。敢えてその「略伝」を草する所以もそこにある。拙稿が「引玉之磚」たりうれば幸いである。

〔1〕 幼少年時代

石評梅は、1902年9月20日（清光緒28年壬寅、農曆8月19日）、山西省平定県に生まれた。乳名を心珠といい、のち汝璧を学名とした。¹³

平定県は山間の町で、石評梅自身が常々語っていたところでは、世俗と隔絶した四方を青々した山に囲まれたところで、大河はなかったが美しい泉の湧き出る、自然に恵まれたところであったという。¹⁴ 石評梅の親友だった女流作家黄廬隠は、この美しい故郷の自然が彼女ののちの文学への傾倒に深い影響を与えたと指摘している。¹⁵ 父親は石銘、字を鼎臣（一説に鼎丞）と言ひ、学識豊かな文人であり、清末の華人であった。長らく教育に従事し、山西省立図書館に勤めたこともあった。石銘の最初の妻は一子汝璜（評梅の兄）を残して早逝したため、石評梅の母は石銘の後妻として嫁いできた。石評梅の死んだ年、父石銘は73歳、母は58歳（おそらく数えであろう）であったという林砺儒の所説に従えば¹⁶ 評梅の生まれたのは、父・石銘の47歳、母の32歳（ともにおそらく数えで）のときということになる。

石評梅の家庭は、石評梅自身と父母と兄夫婦及びその娘の、あわせて6人家族であり、当時としては非常に単純な家族構成であった。裕福とは言えないまでも、読書人の家庭としてはまずまず一般的な経済状況であったようだ。しかし、石評梅自身は自分の家庭について次のように語っていた。

「我が家は大家族ではなかったが、心が通い合わず、考えがまちまちであったことは、とても不幸なことであった。」¹⁷

彼女がこう述べていたことの原因を黄廬隠は次のように説明している。第一に、母親が頑固な夫（石評梅の父親）のせいで苦しんでいるのを目の当たりにしていた彼女が、母親に同情して共に悩み苦しんでいたがためであった。黄廬隠は石評梅の日記から、「……母はその静かな夜の帳のもとでしばしば悲しげな声を漏らし、そのため私はいつも心を痛めて枕をしとどに濡らした。」という一節を引いている。第二に、石評梅の母親が後妻で、兄とは血の繋がりがなかったため、表面的には兄と母の関係は悪くなかったものの、何かしっくりしないものがあつたためのものである。また、兄は長く郷里を離れ、三四年家に戻ら

ないこともしばしばで、兄嫁は幼い娘を抱えて舅らに仕えねばならず、神経過敏なところのあった石評梅が、そうした家庭内の空気を敏感に感じ取っていたためではないかも述べている。¹⁸⁾

両親は利発な彼女を愛したが、その一方彼女に期するところも大きく、とりわけ父の石銘は彼女を厳しく教育した。石銘は仕事から帰ると彼女に文字を教え、彼女がちゃんと覚えられないときには、夜になっても寝ることを許さなかった。そんなとき母親はそばに付き添い、彼女を慰め、彼女がきちんと覚えてから一緒に床に就いた。また、小学校に入ってから、昼間は他の子供らとともに学びともに遊んだが、夜には父親が経書を彼女に講じた。その結果、彼女の古典の素養は他の同級生に抜きんでていた。黄廬隱はこのような彼女の少女時代を概括して、「一方で母の慈愛に包まれ、他方、父親の厳格な教育のもとで育てられた」と述べているが、¹⁹⁾厳格な父親と温厚な母親とに熱愛されながらも、どこかしら不安定な心理状態で幼少年期を過ごしたと言えるのではあるまいか。

12歳で山西省立太原女子師範学校附属小学に入学し、卒業後そのまま山西省立太原女子師範学校に進学した。²⁰⁾ 小学校入学以前から父親の厳しい教育を受けていただけあって、太原女子師範学校時代の石評梅は、学業成績がいつもトップ・クラスであったばかりか、学校の様々な催しでもいつも指導的な役割を果たしていた。また、彼女は音楽を好み、オルガンを巧みに弾くことができた。そのため、彼女の名声は高く、省内の人々はひろく彼女を山西省の才女と認めていたという。彼女は責任感が強く、彼女の学校で学生運動が起こった際も積極的に活動したため、学校当局は規則に照らして彼女を退学させ他の学生の戒めとしようとしたが、彼女の才学を惜しんで結局学籍を回復したという。²¹⁾

この間の事情について、楊揚は次のように書いている。²²⁾

「山西省立太原女子師範学校時代、学習成績優秀であったが、五四運動の影響を受け、学校の禁令を破り、積極的に進歩的刊行物を閲読したのみならず、級友の劉亜雄ら十人とともに、ガリ版刷りの小冊子を編集発行して、「五四」精神を広く伝えようとした。しかし、数期発行したところで学校側から発行を禁止され、停刊の止むなきに至った。」

1919年5月4日に起こった学生を中心とする大規模なデモを契機として、中

全国各地の学生たちは夥しい数の雑誌を創刊しており、石評梅らの活動もこうした動きの一つであった。彼女が所謂「五四運動」に非常に大きな影響を受けたことは明らかであり、教師となったのち教室で学生たちに「五四運動」当時の「徳先生」^{デモクラシー}、「賽小姐」^{サイエンス}、「打倒孔家店」などのスローガンの意義を話して聞かせたりしていたことからその一端を窺うことができる。¹³ 太原女子師範学校時代の小冊子に彼女がどのような文章を書いていたのかは今のところまだ明らかではないが、いずれにせよ彼女もまた1920年前後に作家活動を開始した他の多くの青年作家同様、「五四運動」に触発されて白話による創作を始めたのである。

彼女が太原女子師範に学んでいたころには、父親も年のせいか性格も穏やかになり、彼女と打ち解けて話をするようになった。一方彼女もよく両親に仕え、家庭的にも円満であった。快活な学校生活を送っていたことと相俟って、黄廬隱はこの時期を評して、「彼女の一生の黄金時代であった」と言っている。¹⁴ 両親との関係について附言するなら、石評梅は一貫して母親とは互いに心を通い合わせていたし、父親とも少なくとも青年期以降は良好な関係にあった。「単に慈しみ深い父であるばかりか、私の生涯で最も尊敬している知己でもある。私を認め、私を許し、私を理解してくれているのは父をおいてほかにいない」とまで24歳の石評梅は言い切っている。¹⁵ 父親も老境に入り「かど」がとれ、一方彼女自身も成長し「大人」の目で父を見ることができるようになっていったのであろう。

〔2〕 北京女子高等師範学校時代

太原女子師範を卒業した18歳の石評梅は、1920年の秋、北京女子高等師範学校体育系に入学した。「五四運動」の影響を受け、本来は同校の国文系受験を希望していた石評梅であったが、その年国文系が学生募集をしなかったため、体育系を受験することにしたのである。¹⁶ このことについて、石評梅自身は、「太原女子師範を卒業後上京しましたが、その年文科は学生募集をしておらず、また数理科は私が希望しなかったので、種々の原因で体育部^{マツ}に入学しました。」¹⁷ とだけ書いている。しかし、黄廬隱によれば、「当然失望したものの、その一方、

文科に進学しなくとも構わない、自分の国文は基礎ができているから自分で勉強できる、それより別の学科に進学したほうが、ほかの技能や科学的な知識をさらに身に付けることができるかもしれないと考えて、女高師の体育科を受験することにした」のだという。¹⁸

石評梅の入学した北京女子高等師範学校の前身は京師女子師範学堂であり、女子小学堂教習（教師）養成を目的として1908年（光緒34年）に設立された。1912年、北京女子師範学校と改称され、さらに1919年国立北京女子高等師範学校に改組された。石評梅卒業後の1924年には、国立北京女子師範大学と改められている。¹⁹ 女性に開かれた学校としては、当時最高の高等教育機関と言っているであろう。

この女子高等師範時代、彼女がどのような教師から何を学んだかについては、のちに彼女を北京師範大学附属中学女子部の教師として招いた林砺儒に教えを受けたことぐらいしかわかっていない。林砺儒は1889年に広東で生まれ、1911年から1918年まで日本に留学、1919年、まだ30歳の若さで国立北京高等師範学校（のちに北京師範大学と改称）教授となった。女子高等師範では兼任講師として教育学を講じていた。彼は進歩的教育者として知られており、「五四運動」前後には、学生の運動を支持し積極的に援助していた。1922年からは北京師範大学附属中学主任（校長にあたる——筆者注）をも兼務するようになった。²⁰ のちに触れるように、彼は一時期石評梅を自分の家に住ませたこともあり、言わば彼女の身元引受け人のような人物である。そのほかには、1920年から李大釗が兼任講師として女高師で「社会学」「女権運動史」等の科目を開講していたという事実もあり²¹ 雑誌『新青年』に数々の論文を発表し、当時の覚醒した青年たちに大きな影響力を持っていた李大釗の講義に彼女も出席していた可能性は極めて高い。因みに、のちに「女師大闘争」を通して石評梅が面識を得ることになった魯迅は、1923年10月から1926年8月まで女高師及び女師大で「中国小説史略」及び文芸理論を教えていた。ちょうど、石評梅が卒業した直後に魯迅が女師大に教えに来るようになったわけである。²²

女高師在学中の課外活動では球技、ダンス、スケート、体操等を好む活発な学生であったようであるが、こうした活動と同時に、同級生らと詩社を作り文

学創作活動も始めるようにもなった。²³ 今日知られるその最初の成果は、1921年に発表した新詩「夜行」である。²⁴ 四聯からなるこの白話詩は現在までのところ石評梅の最も早い時期の詩である。暗夜の中で光明を追求して奮闘することを促すとともに、祖国の山河に対する熱情を歌い上げた、いかにも五四運動の洗礼を受けた知識青年らしい昂揚した気分の感じられる作品である。在学中からこのほかにも数多くの白話詩を『詩学半月刊』などの雑誌に発表しはじめ、こうして彼女はまず女性詩人として次第にその名を知られるようになっていった。

ところで、この女高師在学中、呉天放という青年との初恋に破れ、これがその後の彼女の人生に非常に大きな影を落とすことになる。この呉天放という人物が何者であるかは今のところまだ判然としないが、樊蔭南編『当代中国四千人名録』（1936年増訂版、1978年波文書局影印）に、「年三十七歳。浙江奉化人。国立北京大学法学士。現任国民政府外交部情報司幫辦兼第三科科长。」として掲載されている人物と同一人物かもしれない。この「呉天放」がここでいう呉天放であるとすれば、彼は1920年当時21歳（上記37歳はおそらく数えであろうから、満年齢では20歳）で、年齢的には石の二歳年長であり、石と恋におちたとしても不思議はない。

石評梅の父親が、一人上京した彼女の身を気遣い、友人を通して在京の別の友人に彼女の面倒を見てくれるよう頼んだところ、呉天放が彼女の手助けをすることになったのが、そもそもの馴れ初めであった。石評梅はわからないことや解決しがたいことがあるといつも呉に尋ねるようになった。彼は「^{アパート}公寓」暮らしだったので、女である自分が直接訪ねるのは具合が悪いと感じて、最初は決まって呉が石評梅に会いに学校に出向いていた。こうして数か月が過ぎ、ある厳寒の日、彼女が勇気を奮って彼の「公寓」を訪ねたところ、呉から求愛され、彼女もそれに応えたという。²⁵

もともと石は恋愛関係から超然とした生活を望み、相手にもそうした態度を望んでいたが、呉はそういうタイプの男性ではなかった。しかも、決定的な問題は、呉が既に結婚しており、石との関係は恋愛遊戯的なものでしかなかったことである。²⁶ 石評梅は彼女の理想が全くの夢でしかなかったことを知ったとき、心を深く傷付けられてしまった。黄廬隠の表現を借りれば、「これ以後彼女は、

天真爛漫な黄金の天国から、愁いに満ちた深い悔悟の海に沈潜していったのである。」のちに彼女は断乎として呉と絶交したものの、彼女の深い心の傷は永遠に残されたという。²⁷

五四時期の青年男女にとっても恋愛問題が最大の関心事であったことは、茅盾の「評四五月的創作」にも述べられているとおりである。²⁸ 茅盾によれば、1921年4、5、6月の三ヶ月間の百二十余篇の創作小説を概観すると、実にその九割以上が男女の恋愛を描写した小説であり、それらの恋愛小説は、家庭のために思いを遂げられない男女の悲劇でなければ、解決不能な多角関係によって生ずる悲劇であるという。彼は、こうした恋愛小説の主人公のモデルは作者自身もしくは作者の親しい友人であり、観念的な物が多いと批判しているが²⁹、現実にもそうした問題が普遍的にあったからこそ、白話による創作を始めたばかりの当時の青年作家たちが最も身近で切実なそうした問題を取り上げたとも言えるのである。1920年前後に北京大学などの高等教育機関で学んでいた男子学生は、進学前か在学中の休暇に親の決めた相手と結婚する場合が少なくなかった。しかし、当時の結婚は家柄の釣り合う家同士の結婚であり、当人たちの意向とは全く無関係に親同士で話がまとめられるのが普通であった。そのため、親の決めた相手と結婚はしても、夫は北京で一人学生生活を送り、妻は夫の家で舅姑に仕えるというのが一般的であった。けれども、所謂「新文化運動」の影響で、学生たちは封建的な家庭制度に疑問を持ち、恋愛の自由、結婚の自由について盛んに議論するようになっていた。そんな彼らが、教育を受け覚醒した女子学生たちと「五四運動」を契機として実際に交際するようになり、様々な問題が生じてきたのである。茅盾が述べている二つの悲劇がその代表的なものであるが、女性の側からすると、彼女たちを最も苦しめたのは愛する男性が既に結婚していることであった。その結婚が形式的なものであったにしても、その結婚の背後にはそれぞれの「家」が控えており、「家」の決めた結婚を拒絶することは「家」そのものと対決することを意味していた。したがって、既婚男性の場合、これこそ自分の伴侶たるに相応しいと思う女性と出会ったとしても、儒教倫理の鎖を断ち切り、「家」からの経済的援助を全て放棄してまでも「家」の決めた結婚に反逆するだけの踏ん切りはなかなかつかない。また、

もし自分が親の決めた妻と離婚したなら、「二夫にまみえず」という社会通念のために妻が実家の厄介者となり、精神的にも経済的にもどん底の後半生を余儀なくされることを知っていたから、良心的な男性であればあるほど、その苦悩は深かったのである。「五四運動」以後交際の機会の増えた北京の男女学生を私生活で最も悩ませたのが恋愛問題・結婚問題であったのはこうした事情による。吳天放がどのような人物であったかはよくわからないが、いずれにせよ、石評梅もまた当時の他の多くの青年同様、恋愛問題の渦の中に巻き込まれた一人であり、吳天放との恋に苦悩せずにはいらなかったのであった。そんな彼女の苦悩を反映していると考えられるのが、戯曲「誰の罪なのか? (這是誰的罪?)」³⁰である。

1922年4月に発表された六幕話劇「誰の罪なのか?」は、アメリカ留学を経験した青年男女の、封建的伝統的な結婚をめぐる愛情悲劇である。社会・国家の問題を解決するにはまず家庭問題の解決、すなわち家ではなく個人を単位とする自由な結婚の実現がその第一歩であると考え、周囲の環境のために軟化してしまわないことを誓って帰国した二人であったが、男は帰国して間もなく父親に抗しきれずに親の決めた結婚を受け入れてしまう。女は相手の苦衷を察していったんは身を引くことにするが、その男の結婚式の当日、新婦にひそかに毒を盛ってしまう。その結果二人の元留学生は願い適って結婚できたのであるが、女は自分の犯した罪を償うため結局毒をあおって自殺する。おおよそこのような粗筋の戯曲である。

当時、石評梅の在籍していた北京女子高等師範学校ではしばしば「游芸会」を開いており、この戯曲は級友の求めで二晩で書き上げたものであった。³¹したがって、必ずしも完璧なものとは言えず、当時のある評論でもその不十分な点を指摘している。³²しかし、殺人には至らないまでも、同じような問題で苦しんでいた青年男女は少なくなかったから、この戯曲はある程度の共感をもって受け入れられたに違いない。

さて、吳天放と別れようとしていた頃、すなわち1923年の初め、石評梅は父親の教え子でもあった高君宇と「山西同郷会」の活動を通して知り合った。彼女は郷里で彼の名前を耳にしたことはあったものの、上京した当初彼と顔を合わせ

る機会はなく、それまでは二人の間に交流はなかった。⁵³

高君宇は、1896年10月22日（清光緒22年丙申、農曆9月16日）、山西省靜楽県に生まれた。山西省立第一中学時代から進歩的學生運動に参加し、1916年北京大學進学後は「中国青年革命の健将」と称されるほどに積極的な学生活動家であった。1920年、李大釗の指導の下に中国最初のマルクス主義研究宣伝団体である「北京大学馬克斯学説研究会」、「北京共產主義小組」等に参加し、北京社会主義青年團書記に選ばれている。1922年には、中国社会主义青年團中央委員や中国共産党中央委員にも選出されており、言わば「五四運動」の申し子として活躍した初期中国共産党員である。石評梅と知り合った1923年春頃は、数多くの論文を《嚮導》及び《政治生活》等に発表するかたわら、指導者の一人として二・七大罷工にも参加するという状況で、活発な政治活動を展開していた時期でもあった。⁵⁴

二人の間に淡々とした交際が始まり、ほどなく高君宇は石に魅かれ、彼女を恋するようになった。呉との失恋の痛手のため別の人の愛情を受け入れるつもりはなかった石も、高君宇の誠実な態度に次第に心動かされるようになっていった。こうして、高君宇と知り合ってから石評梅は思想的にも文学上でも高君宇の影響と励ましを受け、しだいに彼にひかれていった。しかし、初恋に破れて感ずるようになった人生に対する懐疑の念が消えず、また、高君宇の「包辦婚姻（本人の意思を無視して親などが決めてしまった結婚）」の破壊を望まなかったために、石評梅は高君宇との関係に（高君宇が「包辦婚姻」を解消したあとまでも）ためらいを感じ続けていた。⁵⁵ 彼女は日記に次のように書いている。

「……我不幸有W君傷心之遺運，奈何天幸偏以一腔心血灑我裙前？……人生豈真為苦痛而生耶！」

（……私には不幸にして呉さんとの悲しい巡り合わせがあったのに、天幸（高君宇を指す——筆者注）はどうして私に一途に熱情を寄せるのだろうか。……ああ、人は苦しむために生まれてきたのかしら。）⁵⁶

結局、二人がついに結ばれることのないまま、高君宇は1925年3月にこの世を去った。石評梅が高君宇のことを強く思うようになったのは、皮肉にも彼の死後のことである。「痛哭英雄」「天幸」などをはじめとして、今日わかってい

るものだけでも二十篇近くの高君宇を悼む詩や散文がそれを証明している。

1923年の夏、女高師で毎年行なっている卒業生の参観旅行が実施され、石評梅は第二組国内旅行団（本科の12人と博物科の14人で組織）に参加し、保定、武漢、南京、杭州、上海、青島、済南等を遊覧して帰京した。彼女はその際の見聞・感懐を夏季休暇中に長篇游記「模糊的餘影」としてまとめ、それは1923年9月から《晨报副鐫》遊記欄に連載された（9月4日～10月7日）。⁹⁷ 叙情と叙景とが渾然となったこの作品には、彼女の散文作家としての本領がよく表われている。

〔3〕 教師時代

1923年秋、優秀な成績で北京女子高等師範学校を卒業した石評梅は、北京師範大学附属中学女子部の訓育主任兼体操教師として赴任した。北京師範大学は清朝末期の1902年（光緒28年）京師大学堂附設師範館として創設され、1908年（光緒34年）京師大学堂から独立して京師優級師範学堂となった。中華民国成立後の1912年（民国元年）北京高等師範学校と改称し、さらに1923年に国立北京師範大学に改められた。当時有数の名門教育機関である。附属中学は、京師優級師範学堂時代の五城中学堂を前身として1912年7月成立、附属中学女子部は1921年に創設された。⁹⁸

1922年には二学年となっていた附属中学女子部に適当な指導者がいないことを苦慮した附属中学主任の林砺儒が女高師当局と相談したところ、校長の許寿裳、体育系主任の曾仲魯ともに石評梅を推薦した。もともと許寿裳は、彼女を女高師に残して勤務させようと考えていた。しかし、前年彼の要請で林が教務長代理を二ヶ月勤めてくれた恩義に報いるために、石評梅を北京師範大学附属中学女子部に譲ることにしたのである。そこで、林は自分の教え子でもあった石評梅に附中女子部に来てくれるよう要請し、石評梅は一日思案したあと承諾した。⁹⁹

在学中は女高師の寮に暮らしていた石評梅は、北京師範大学附属中学女子部

就職と同時に、すなわち1923年秋から北京師範大学教職員宿舎に移り住んだ。「宿舎」とはいうものの、実際には荒れ果てた古い廟の一面にすぎず、彼女の部屋は大きな槐が半ば屋根を覆う古びた建物であった。かねてより梅の花の高潔を愛して評梅という名を常用していた彼女は、その部屋を「梅窠」と命名した。彼女は自分と親友の陸晶清の詩文集を「梅花小鹿」（小鹿とは陸晶清のこと——筆者注）と名付け、「幾生修得到梅花」「梅作主人月作客」といった類の梅花箋を便箋として用いるほど、梅の花を好んでいたという。⁴⁰その後、重病に罹ったのを契機に、1924年5月にこの「梅窠」を去り、1928年3月まで宣内辟才胡同南半壁街13号の林砺儒宅に仮寓した。⁴¹

さて、教育者としての石評梅については、四年間彼女の同僚だった汪震が詳しく論じている。

石評梅の理想は男女平等であり、そのためには女性の地位を高めなければならず、教育こそが女性の地位を高めるための唯一の方法だと考えていた。女性の心理を改革する方法として、石評梅には次の二つの原則があった。一つは、男性の優れている点を学ぶことであり、もう一つは、女性固有の優れた点を保つことである。男性の優れている点として、石評梅は、^{きまぱりしている}「爽直」「決断」「勇敢」「強健」を挙げ、こうした点については男性に学ばなければならないと主張した。一方、女性の優れている点としては、^{ちやうい}「留心」「精細」「溫柔典雅的感情」があり、こうした長所を伸ばしていこうと考えていた。石評梅が最も好んだ言葉は「大大方方的」であり、これは屈託なく大胆で意気盛んな気性を意味している。一方、最も憎んだ言葉は、「小姐氣（お嬢様気質）」「小心眼（心の狭いこと）」であった。石評梅の女性に対する学校教育の目的を一言で言うならば、女性に現代社会の様々な豊かさ（精神的、肉体的、文化的、生活上その他……）を享受させ、女性の地位を向上させることにあった。また、石評梅の女子に対する道徳教育上の要求は、

- ①平民化（＝どんなことも自ら行い、他人を使役しようとしぬ態度）、
 - ②朴实（＝虚栄心を廃する）、
 - ③体育（＝柔弱で怠惰な生活習慣を改め、
- 労苦に耐えて生活できる）の三項目であり、なかでも体育を道徳教育の糸

口として重視していた。⁴²

黄廬隱もまた、石評梅の教育者としての貢献について次のように述べている。

「彼女は教育上大きな貢献をしたが、とりわけ師大附中における彼女の教育成果は顕著であった。…（中略）…評梅は民国12年附中女子部主任として赴任して以来、理論的な指導法で学生たちを指導する一方、率直で温かい思いやりで彼女たちを感化した。それゆえ学生たちは、恐れて規則を守るのではなく、心底喜んで彼女の指導を受けた。学生が過ちを犯したとき、彼女は誠実に学生たちを教え導き、涙で声を詰まらせることもあった。あたかも姉が妹に接するような態度であったから、彼女の感化を受けなかった学生は一人としていなかった。そのため、附中女子部は創設以来、なんら事件を起こすこともなかったばかりか、公明正大で優美な学風を作り出した。彼女は学校管理の面で、以上のような成功を取めたのである。さらに教授の面でも、学生のためになることを絶えず考え、彼女は担当授業数が多かったが、どんなに忙しくとも、学生の宿題に対していい加減に済ませることはなく、しばしば深夜までかかって学生の書いたものに手を入れ、翌朝早く学校へ行き授業を行なった。」⁴³

教育者としての石評梅が、誠実でひたむきな態度から数多くの生徒に慕われていたことは、彼女の死の直後の教え子たちの言動などからも明らかだ。そしてまた、死後五十数年を経ているにもかかわらず、中肉中背でつやつやとした少し浅黒い顔に眼鏡を掛けていた彼女のことを教え子たちが懐かしく回想している数々の文章からも、その一端が窺えるであろう。⁴⁴一方、彼女の恩師であった林榭儒ものちに彼女の追悼会で、「石先生の死は、わが附中の受けた影響が最も大きいが、同時にまた教育界にとっても大きな不幸であった。…（中略）…石先生の死によって、私のいくつかの理想さえも彼女とともに失われてしまった」⁴⁵と述べており、文化的素養を備えた体育教師としてその将来に期待を寄せていたことが窺える。

ところで、彼女の在職中の1924年1月17日、北京師範大学附属中学校友会の招きで魯迅が講演したことがある。演題は「未有天才之前(天才の出るまえ)」である。当時魯迅は同校国文系の兼任講師であり、附属中学校友会は師大附中

の学生と教師の教養を高め親睦を深める目的で1918年成立した団体であった。⁴⁵この魯迅の講演会は深い印象を石評梅に与えずにおかなかった。三年以上経った後にも、自分の教え子の一人にこう語っている。

「民国十三年の一月、魯迅は私たちの学校に来て講演しました。演題は『未有天才之前』で、魯迅はこう言いました。“天才はひとりで生まれ、ひとりで育つものではなく”、“天才を育てることのできる民衆によって生み出され育てられるものなのです。”……“例えば、背の高い木がほしい、美しい花が見たいと思うなら、必ず良い土が必要です……”——私は今あなたが天才だとかどうだか言いたいではありません。ただ私は天才を育てる土になりたいと思っていますのです。努力しましょう！ 私はあなたに希望を抱いているのです。」⁴⁶

石評梅は魯迅の語った言葉に感銘を受け、教師たる自分は優れた人物を育てるための「土」になろうと決意したのである。

〔4〕《婦女周刊》編集者として

教師として実社会に足を踏み入れた石評梅は、その文筆を見込まれて当時北京で発行されていた進歩的新聞《京報》の副刊の一つである《婦女周刊》の編集にも当たるようになった。《婦女周刊》は1924年12月10日に創刊され、以後毎週水曜日《京報》に附された。主として婦人の生活を反映した文芸作品と婦人解放に関する評論などを掲載し、1925年11月25日までに50期発行され、12月20日に「周年紀念特号」を発行して停刊した。北京女子師範大学の薔薇社が編集にあたり、石評梅、陸品清らがその中心であった。⁴⁸「発刊詞」を執筆した石評梅は、そのなかで《婦女周刊》の努力目標として、

- 一、粉碎偏枯的道德、
- 二、脱棄礼教的束縛、
- 三、發揮芸術的天才、
- 四、拯救沈溺の弱者、
- 五、創造未来的新生、
- 六、介紹海内外消息。

の六項目を掲げ、《婦女周刊》が「世界的⁴⁷荊叢」を焼きつくすたいまつとなり、全人類の心を震わせる「銀鈴」のような「呼声」とならんことを誓うと記している。⁴⁹

ここで石評梅の婦人解放に関する考え方について一言しておく。彼女は、男女両性が共同で支える社会こそ理想的な完全なものであり、婦人解放運動とは女性の幸福を謀るためというよりは、むしろ人類のために完全な社会を求めるものだと考えていた。したがって、女性が奮起せねばならぬのはこの社会を完璧なものにするためであり、婦人解放運動とは男性の権利を奪うものでも恩恵を施してくれるように要求することでもなく、女性が本来持っているはずの権利を取り戻すための運動であった。そして、それがとりもなおさず社会の発展・人類の幸福に貢献すると考えていたのである。彼女は女性の地位を向上させるための「根本的な方法」として、「人類の精神を独立させる原動力」たる教育と、「人類の生活を変化させる前提」たる経済の二点に着目して、男女平等に教育を受けられるようにすることで、精神の自由を獲得するとともに女子の経済的自立への道をも開くことができると考えたのである。⁵⁹

彼女のこうした考え自体は、平利で安定した社会であればそれなりの効用も期待しうるであろう。だが、当時のように家庭においては儒教倫理の桎梏の下にあり、社会においては跋扈する軍閥に蹂躪され、勃興してきた資本家に搾取されていた絶対多数の女性にとっては、教育こそが婦人解放の道といわんばかりの石の論は些か迂遠なものと言わざるを得ない。同じ時期の向警予らの婦人解放論と比べると、あまりに楽観的に過ぎると言えるだろう。北京の教育界の中でのみ生活していた彼女の思想的限界と言うべきかもしれない。

この《婦女周刊》の活動の総括と言える文章「総帳」を石評梅は「周年記念特号」に書いている。それによると、編集担当者が石評梅を含めて六人、外部から寄稿したものが二十人弱で、その大半が男性であり、内部の者以外の女性執筆者は黄廬隠ら数人にすぎなかった。⁶⁰ 外部からの寄稿者の一人に魯迅があり、「周年記念特号」に「寡婦主義」を発表している（1925年11月23日執筆）。魯迅は当時所謂「女師大闘争」に深く関わっており、宗帽胡同に設けられた女師大臨時校舎に頻繁に足を向けていた。⁶² また、教え子の許広平などからも女師大内の様子や女師大薔薇社編集の《婦女周刊》について耳にしており、こうした関係から《婦女周刊》からの原稿依頼を引き受けたのであろう。しかし、魯迅の《婦女周刊》に対する評価はあまり芳しくなかった。《婦女周刊》内部の困境

などについて触れた許広平の手紙に対する返事の中で、「これまでの《婦女周刊》はやはり一種の文芸雑誌に近く、議論の文章が少なく、時にあってもあまり出来は良くない。」と記している。⁵³

因みに、許広平の手紙の中で石評梅のことを「波微」という彼女の筆名を上げるのみで説明も加えていないところを見ると、「波微」という名だけでそれが誰であるのか諒解ができていたものと思われる。魯迅と石評梅との関係についてはいま一つはっきりしない。しかし、すでに述べた石評梅と教子との会話や、また、魯迅が廈門にむけて北京を去ったその日、彼女が魯迅を駅まで見送りに出掛けていること⁵⁴から推して、石評梅が魯迅を深く尊敬していたことは言を俟たない。魯迅の側が石評梅をどう見ていたのかはよくわからないが、石評梅の死の直後、当時上海にいた魯迅がそのことを章廷謙宛ての手紙の中に記しているところをみても、⁵⁵なにがしかの関心を抱いていたことは確かである。

さて、話を《婦女周刊》に戻そう。石評梅は「総帳」の中で、自分たちの努力や言論が理想から遥かに掛け離れていたことを認め、「花園派」だとか「お嬢様ふうの出版物」だとかいう批判を甘受すると書いている。そして、その原因の一つとして、執筆者たちが北京の華やかな世界で生活しており、農村婦人の苦境を知らないため、紙上の空談に終わってしまったことをあげている。しかし、その責めを石評梅のみに帰することはやや酷であると言わねばならない。許広平はさきの手紙の中で、石評梅とともに編集に当たっていた陸晶清が家庭の事情で北京を離れなければならないことを記したあと、「今は、彼女(陸を指す——筆者注)が去り、恐らく男性の作品が《婦周》を占領してしまうでしょう(波微一人を除いて)。」⁵⁶と書いている。このことから考えると、男性の作品が多数を占めていたなかで、「波微」すなわち石評梅だけがともかくも孤軍奮闘していたわけである。とはいえ、彼女一人では週一回分の原稿を全てまかなうことは出来ないし、かと言って男性にばかり依頼することも潔しとせず、いきおい筆の立ちそうな女性に原稿依頼をせざるを得なかったわけである。しかし、恐らく当時の北京の女性執筆者には石評梅らの意図に沿うものが少なかったために、紙面が上滑りなものになりがちだったのであろう。

むろん石評梅自身もそうした限界を免れていたわけではないが、人一倍鋭い

感受性を備えていた彼女は、自分が局外者のごとく「お嬢様」式の言動を続けていることに疑問を感じ、それを次第に恥じるようになっていった。魯迅の短篇「一件小事」に似た雰囲気を感じさせる短いエッセイ「同是上帝的兒女」は、現状に疑問を覚えはじめた、そんな彼女の心のたゆたいを感じさせる。

北風の吹き荒ぶ中ようやく見つけた人力車は、瘦せさらばえた兄妹のボロ車だった。父親を兵役に駆り出され、母親が病床にあると言う二人の兄妹の、兄が前から引き、妹が後ろから押すことでようやく動かしているそのボロ車に乗り込んだ石評梅は、車が動き出してまもなく戦慄を覚え、思わずうなだれる。なぜ自分は車に乗ることができるのに、彼等はただこうして車を引くだけなのか？なぜ、自分は裏に毛皮の付いた絹の服を着ているのに、彼等は継ぎ接ぎだらけの一重を羽織っているだけなのか？自分のその行動が浅薄なものでしかないことを知りつつも、彼女は車を降りて、持ち合わせの小銭を全て彼等に与えずにはいられなかった。「今でも私は疑問を抱いている……私たちはひとしく上帝の子なのに。」⁵⁷

これは、彼女自身認めているように、単なる同情にすぎないかもしれない。しかし、こうした弱者への同情が、やがて三・一八事件に象徴されるような軍閥の直接的暴力を身近に見聞きし、さらに高君宇が目指していたものがなんであったのかを考えるなかで、強者に対する批判へと発展していったのである。

[5] 三・一八事件と石評梅

1925年3月5日、高君宇が急性虫垂炎のため北京の協和医院で息をひきとった。高君宇はもともと肺を病んでおり、それまでもしばしば咯血していた。前年末広州から北上する孫文に病を押しつけて随行したのが災いして、高は北京入りの後しばらく德国医院に入院していた。高が死んだのは、無理を承知で德国医院を退院し政治活動を再開した矢先のことであった。⁵⁸ 高の死を聞くや否や、石評梅はその場で昏倒してしまった。それほどまでに彼の突然の死は石評梅に大きな衝撃と深い悲しみとをもたらしたのである。しばらくして気が付いた彼女は、人に頼んで自分の写真を取りに行ってもらい、納棺の際その写真を遺体の

傍らに納めた。⁵⁸のちに高君宇の遺体を陶然亭に埋葬する際、石評梅は次のような誓いの言葉を綴り、それは墓石に刻まれた。

「君宇！ 我無力挽住你迅忽如彗星之生命，我只有把剩下的泪流到你墳頭，直到我不能来看你的時候。」

（君宇！ 彗星のように速やかに飛び去っていったあなたの命を挽きとどめる力が私にはありません。私はただあなたの墓前で涙するばかりです、あなたに会いに来られなくなるその日まで。）⁵⁹

この言葉に違わず、石評梅は高君宇の死後、命日はもとより、ほとんど毎週日曜日に彼の葬られている陶然亭を訪ねているほか、毎年清明節には必ず墓参りに訪れている。⁶⁰そして、彼女が高の死を悼む数々の詩文を執筆していることは既に述べたとおりである。

高の死の痛手から立ち直ってはいなかったが、石評梅は人前では努めて快活を装って暮らしていた。1925年夏には、師大附中の教員及び男女学生50人前後とともに八達嶺に旅行し、宿において「文芸晩会」に参加している。⁶¹そして、ちょうどその頃から、北京女子師範大学の所謂「女師大闘争」が激しくなっており、彼女も嘆いてばかりではいられなくなってきた。

封建的な教育を推し進め、学生の政治活動を封じ込めようとした楊蔭楡校長に対する抗議に端を発した女師大学生運動は、校長側が1925年5月許広平・劉和珍ら六名の自治会役員除籍を公布するに及んで一段と険しさを増し、8月初めには校長側の教育総長（文部大臣に当る——筆者注）章士釗が女師大の解散命令を下すに至った。⁶²魯迅をはじめ多くの知識人が当局に対する抗議文を発表したが、同校の卒業生の一人でもあった石評梅もまた楊蔭楡・章士釗らの専横に強い憤りを覚えた。彼女は、「報告停辦後の女師大——寄翠湖畔的晶清」（第36期、1925年8月19日）、「女師大慘劇的經過——寄告晶清」（第37期、1925年8月26日）などを《婦女周刊》に発表し、女師大の現状を広く世に伝えることで側面から「女師大闘争」を支援しはじめた。彼女は、楊・章らの女師大破壊は単に学内だけの問題だけではなく、中国教育界全体、ひいては中国そのものの存亡に関わる問題として位置付けている。

「我々二億の女性は、楊氏の暴威の下に屈伏し、蹂躪されるに任せてお

くことは決してできません。……以前は純粹かつ單純な校長をめぐる問題でしたが、今では既に我々女性全体の人格、教育、解放、権利にわたる問題となりました。さらに大きく言えば、中国教育界の問題であり、教育が国家に影響の及ぶものである以上、中国の存亡に関わる問題なのです。⁶⁴

「女師大闘争」を通して、前向きに社会に目を開いて現実と向き合うきっかけを与えられた石評梅は、それに続く三・一八事件によって人間として文学者としてさらに大きく成長していくことになる。

1926年3月18日、日本の中国に対する主権侵害に抗議し段祺瑞政府に請願に集まった約二千人のデモ隊に対して、段祺瑞執政府の護衛隊が発砲し、死者47名、負傷者150人余りという多数の犠牲者を出す大惨劇が起きた。魯迅が「民国以来最も暗い日」(「無花的蔷薇之二」)と書き、朱自清が「我々は永遠にこの日を忘れてはならない」(「執政府大屠殺記」)と記したこの日の事件は、石評梅にも強い衝撃を与えた。彼女自身はこの請願に参加しなかったが、友人の多くが参加し、劉和珍がむごたらしい死を遂げ、親友の陸晶清も負傷した。とりわけ、女師大闘争を通して知り合った劉和珍の死は石評梅を打ちのめすほどの激しいショックを与えずには置かなかった。⁶⁵ 事件の翌日執筆した「血屍」(《京報副刊》第446期、1926年3月22日)や、一週間後に執筆した「痛哭和珍!」(《京報副刊》第453期、1926年3月29日)にはそんな彼女の悲しみが溢れている。しかし、この頃の彼女はもうただ悲しみにうちひげられているだけの女性ではなくなっていた。隙間から血が流れ出ている粗末な棺に納められた劉和珍の亡骸を前にして、彼女はこう誓う。

「和珍! 安らかに眠りなさい。私たちはあなたの亡骸を踏み越え、あなたが私たちにくれたたいまつを手に、あなたの願いを実現し、あなたの恨みを雪ぎ、未来の光明を創り出します。……たとえ私たちが倒れても、私たちの未来の友人たちがあとに続くでしょう。」⁶⁶

彼女は、負傷した陸晶清にも、

「暗黒の中で光明を捜し求めている以上、死と影だけが私たちのあとに付き従っていて当然なのです。……一人また一人と倒れても、私たちは彼らの死体を踏み越えていくのです。私たちもまた倒れたなら、当然あとに

続く人々がまた私たちの死体を踏み越えていくのです。⁶⁷

と語っている。そこには若干の虚無の影が射しているかもしれないが、少なくとも現実に流されて安穩としてはいない彼女の姿が読みとれる。この頃の彼女は、高君宇の危険な革命運動に肩をひそめるような女性ではなく、常に死と隣り合わせの時代に生きていることを強く自覚した女性へと成長してきている。そして事実、この三・一八事件以降彼女の筆が力強く変化していったのである。⁶⁸

ところで、石評梅の親友陸晶清は、1926年の初秋から年末まで宣外教場頭条の「雲南旅京学会」内の小部屋に住んでいた。室内の装飾の多くが緑色だったのに因み、石評梅はその部屋を「緑屋」と命名し、毎日少なからぬ時間をそこで過ごすようになった。「陶然亭の君宇の墓前と『緑屋』の中でだけ、本当の自分でいられる」と石は陸晶清に漏らしていた。⁶⁹ 石評梅・陸晶清主編の《薔薇周刊》が《世界日報》の副刊の一つとして創刊されたのは、この「緑屋」時代である（1926年11月創刊）。かつての《婦女周刊》同様《薔薇周刊》も婦人解放問題に重点を置いていたが、総合的に見て《婦女周刊》より内容豊富で、執筆者の幅も拡がりをもっていた。⁷⁰ 石評梅は急逝するまで編集・企画業務の中心として活動しただけでなく、数多くの作品をこの《薔薇周刊》に発表した。その中には、「ともかく前に向かって歩もう。……私たちはただ自分の身体からだを燃やし続けて、後から来る者の明るいたいまつになるよりほかないのだ。」と語る「爆竹声中的除夕」（第11期、1927年2月8日）や、1927年4月28日断頭台に消えた李大釗に哀悼の意を捧げた「断頭台畔」（4月30日執筆、第23期、1927年5月3日）など、彼女の思想上の変化を窺わせる作品が少なくない。《薔薇周刊》の編集に当たっていた時代、すなわち1926年秋以降は、石評梅が最も精力的に執筆活動を行ない、また作品自体も深みを増していった時期と言える。また、教師としても、清華大学で開催された華北運動会に師大附中の女子バレーボール選手を率い、大学生を相手に健闘し見事準優勝を果たさせるなど、⁷¹ 生徒と心を一つにして彼女たちの教育に力を注いでいた時期でもあった。しかし、不幸にして、文学者としても教育者としても今まさに充実した収穫期に入ろうというところで、彼女は世を去らねばならなかった。

〔6〕 石評梅の死

1928年9月18日の朝、石評梅は身体の不調を感じつつも、いつもどおり勤務先の北京師範大学附属中学に出勤した。いったんは治まったものの、非常勤をしていた若瑟女校で体育の授業をしていたとき頭痛が我慢できないほどになってきたため、早退して家で休んでいた。たまたま来合わせた友人の瞿冰森・袁子英・甘之泉の三人は、病名が何であるかわからないまま知り合いの漢方医に往診を依頼し、その日は漢方医の処方に従い薬を飲ませて石評梅を休ませた。翌19日、いったんはやや良くなったかにみえたが、石評梅の病状がかなり深刻なものであると感じた友人たちは林砺儒の判断を仰ぐことにした。病床を見舞った林砺儒は漢方医に治療を任すことに反対し、友人の西洋医に往診を求めたところ、腸チフスまたは脳病との診断であった。友人らは林砺儒と善後策を協議し、石評梅自身の同意の上、日本人医師の経営する山本医院に入院させることに決めた。候補にあがった三つの病院のうち、首善医院については実情がよくわからず、協和医院は高君宇の死んだ病院だったため石評梅の協和に対する印象が良くなかった。山本医院は林砺儒が院長の山本と面識があり、彼が強く推したからである。かくして翌20日朝、瞿冰森・黄廩隠・林砺儒が付き添い、車で山本医院に石評梅を運び入院させた。

山本医院に入院したものの、治療方針もはっきりせず、石評梅に対する治療態度も友人らを満足させるものではなかった。入院して二日過ぎても病名すら明らかにならないことに業を煮やした友人らは、知り合いの協和医院の医師と相談の上、石評梅を協和医院に移すことに決めた。9月23日、喧嘩別れのような形で友人たちは石を山本医院から連れ出し、そのまま協和医院に再入院させた。協和医院では、その日のうちに石評梅の病気が腸チフスではなく脳炎であることが検査の結果明らかになった。しかしながら、協和に移ってからも回復の兆しはなく、石評梅はほとんど昏睡状態に近い毎日が続いた。9月30日の深夜、石評梅は突然危篤状態に陥り、瞿冰森・黄廩隠と母方のおじにあたる李士美の三人が看取る中、10月1日午前2時15分ついに永眠した。⁷² ちょうど満26歳の誕生日を迎えたばかりでの、あまりにも早すぎる死であった。

石評梅の生涯—石評梅略伝初稿

石評梅が息をひきとった10月1日の朝、林砺儒は師大附中の集会で彼女の死を報告し、哀悼の意を表わすためこの日を休校とした。女生徒全員と男子生徒代表は葬儀に参列するため校庭に整列して協和医院に向かった。午前十時すぎ、二百人余りからなる葬列は協和医院を出発し、帥府園、王府井大街、長安街、和平門、西河沿、下斜街を経て、午後一時に北平西南の長寿寺に到着した。⁷³その後、石評梅の追悼会は少なくとも二度行われている。

まず、師大附中の教職員と師大附中男女生徒による「石評梅先生追悼会」が1928年10月13日、午後2時から行なわれた。祭文を読み上げた後、追悼会主席の林砺儒が石評梅の履歴を報告し、ついで黄蘆隠および石評梅の教え子や師大附中卒業生が追悼の辞を捧げ、来賓として同郷の作家李健吾が追悼演説を行なった。最後に親族を代表して従弟（表弟）の張恒寿が挨拶し、追悼会主席の林砺儒が石評梅の蔵書を師大附中図書館に寄贈することを報告して、午後四時すぎ閉会した。出席者は卒業生・友人その他も含め、五百人余りであったという。⁷⁴

二度めは、世界日報社、女師大学生会、春明女校、女一中1928年三甲級、薔薇社、無須社、緑波社等の団体が合同で行なったもので、10月21日の午後2時より、女師大大講堂で開催された。まず主催者の黄蘆隠が石評梅の経歴を報告し、瞿冰森が病気の経過を報告、ついで袁君珊（薔薇社を代表）、女師大学生会、春明公学の代表が祭文を読んだ。さらに追悼の辞を緑波社、婦女職工会の代表が捧げ、その後、瞿菊農、徐祖正、林砺儒の三人が来賓として追悼演説を行なった。最後にここでも親族を代表し従弟の張恒寿が挨拶して閉会した。出席者は三百人余りであったという。⁷⁵

この二度の追悼会は、前者が教師としての彼女を知る人々による公的なものであり、後者は作家・編集者としての石評梅の友人たちによるやや私的なものと言えるかもしれない。いずれにせよ、その才能を完全に開花させぬまま逝った石評梅のために多くの人々が痛恨の思いで催したものであったのは確かである。その後、1928年12月1日には、恩師や友人、教え子の追悼文を集めた

『石評梅女士紀念特刊』が薔薇社の編集により世界日報社から刊行された。また、黄蘆隠の尽力により散文集『偶然草』が1929年に北京の華嚴書店から、1931

石評梅の生涯—石評梅略伝初稿

年には第二散文集『濤語』が陸品清の努力で上海の神州国光社から出版され、彼女の短い一生の証となった。⁷⁶

1929年10月2日、逝去からおよそ一年経ったこの日、黄廬隱、袁君珊、瞿冰森、陸品清ら親しい友人たちに見守られて、石評梅は陶然亭の高君宇の墓の右隣に埋葬された。こうしてようやく彼女は高君宇のもとに戻ってくることができたのであった。⁷⁷

石評梅の生涯—石評梅略伝初稿

石評梅の生涯 註

- (1) 管見の及ぶ限りでは、石評梅逝去時の追悼文等を除けば、これまで橋川時雄『中国文化界人物総鑑』（中華法令編印館、1940年）及び李立明『中国現代六百作家小伝』（波文書局1977年）に誤りを含んだ短い紹介があるのみで、この二書以外の文学者事典、人物事典等にその名を見出すことはできなかった。しかし、『石評梅関係資料』に掲げた張以英・諸天寅・完顔戎『中国現代散文一百二十家札記』（上下）に取り上げられていることからわかるように、石評梅はようやく「復権」を果たしつつある。
- (2) 近年石評梅について書かれたものについては、(註)の後に掲げてある。なお、本稿執筆に際しては、それらの中でも特に姜徳明、楊揚、白舒榮諸氏の論文から裨益するところが大きかった。
- (3) 林砺儒（劉浩筆記）「評梅的一生」（追悼会での報告）；原載〈北平大学附中校友会会刊・第5期・紀念石評梅先生專頁〉、楊揚編『石評梅作品集（戯劇游記書信）』所収による。372～378頁。なお、石評梅の筆名には、評梅、評梅女士のほか、波微、漱雪、心珠、林娜、夢黛などがある。
- (4) 黄蘆隠「石評梅略伝」（以下「略伝」と略称。）；『石評梅女士紀念特刊』（薔薇社編、1928年12月1日、世界日報社）、『石評梅作品集（戯劇游記書信）』所収。184～192頁。なお、以下の各註において、黄「略伝」及び林「評梅的一生」については、繁を避けるため頁数を一々注記しなかった。
- (5) 黄蘆隠「略伝」。
- (6) 林砺儒「評梅的一生」
- (7) 黄蘆隠「略伝」。
- (8) 黄蘆隠「略伝」。
- (9) 黄蘆隠「略伝」。
- (10) 1924（5？）年、石評梅は焦菊隠宛ての手紙に、
「幼いとき父が他郷で官に就いていたので、父とともに郷里を離れていた。13歳で学校に入った。それ以前は家で老先生に教えを受けていた」（『石評梅作品集（戯劇游記書信）』105頁）と記しており、数えて13歳で初めて学校教育を受けたことになる。また、黄蘆隠「略伝」では、「評梅は省城の師範学校附属小学卒業後、そのまま直接師範学校に進学した」と書いている。以上を総合すれば、満12歳前後で太原女子師範附属小学に入学し、まもなく女子師範に進学したことになる。
- (11) 黄蘆隠「略伝」。
- (12) 楊揚「火把燎然 呼声警深」；『北京女傑』99～100頁。
- (13) 顔一烟「回憶我的好老師石評梅——為『石評梅作品集』出版而作」；『石評梅作品集（戯劇游記書信）』13頁。顔は1927年入学の石評梅の学生。
- (14) 黄蘆隠「略伝」。
- (15) 石評梅「爆竹声中除夕」；原載〈薔薇周刊〉第11期、1927年2月8日。『石評梅作品集（散文）』257頁。
- (16) 黄蘆隠「略伝」。
- (17) 前掲焦菊隠宛て書簡。註10参照。
- (18) 黄蘆隠「略伝」。石評梅は林砺儒にも「一つには科学的な知識を身につけるため、二つには専門的な技能をマスターするため」と語っていたという。（林砺儒「評梅的一生」）
- (19) 易價「国立北平師範大学」；『中華民國大学誌』（中国新聞出版公司、1953年、台北）62～67頁、『北京師範大学校史』（北京師範大学出版社、1982年）、丁致聘編『中国近七十年來教育記事』（台湾商務印書館、1935年初版、1970年再版）等に拠る。
- (20) 蘇渭昌「林砺儒」；陳景鶴主編『中国近現代教育家伝』（北京師範大学出版社、1987年）301

石評梅の生涯—石評梅略伝初稿

～324頁。

- 21) 程俊英・羅静軒「五四運動的回憶点滴」:「五四運動回憶錄・上」(中国社会科学出版社, 1979年) 277頁。程俊英, 羅静軒の二人は当時女高師国文系の学生。
- 22) 陳漱渝「魯迅与女師大学生運動」(北京人民出版社, 1978年) 15頁。
- 23) 白舒棠「早隕的星——記石評梅」;「十位女作家」64頁。
- 24) 国立山西大学新共和会会報《新共和》第1卷第1号, 1921年12月10日。「石評梅作品集(戲劇游記書信)」所収(152～153頁)。
- 25) 黄蘆隱「略伝」。なお,黄蘆隱は実名を挙げず,「W君」とのみ記しているが,陸品清「追記評梅——為「石評梅作品集」出版而作」(「石評梅作品集(詩歌小説)」10頁)により「吳天放」と知れる。
- 26) 黄蘆隱「略伝」。
- 27) 黄蘆隱「略伝」。
- 28) 郎損「評四五六月的創作」;《小説月報》第2卷第8号, 1921年8月。
- 29) 郎損「評四五六月的創作」及び茅盾「『中国新文学大系・小説一集』導言」(上海良友圖書印刷公司, 1935年初版, 1936年三版)。
- 30) 「這是誰的罪?」, 原署名・評梅女士。《晨報副鐫》1922年4月1, 2, 3, 4日に連載。
- 31) 白舒棠「早隕的星——記石評梅」;「十位女作家」57～58頁。
- 32) 鄧拙園「評梅女士的「這是誰的罪?」」;《晨報副鐫》1922年4月8日。
- 33) 黄蘆隱「略伝」。
- 34) 「中共党史人物伝」第11卷(76～108頁)及び,「弘毅果敢的青年先鋒——五四時期的高君宇」(「五四群英」;河北人民出版社, 1981年, 103～111頁)等を参照した。なお,石評梅と高君宇との関係については別稿「石評梅と高君宇」で詳しく論ずる予定であるので,本稿においては簡単に触れるにとどめておく。
- 35) 結局, 1924年6月高君宇は妻に離婚を申し入れたが,石評梅は離婚を思いとどまるように何度も勸めていた。彼女は「寧願犧牲個人幸福, 而不願侵犯別人的利益, 更不願拿別人的幸福当作自己的幸福。」と漏らしていたという。高全徳「憶評梅——写在「石評梅作品集」出版的時候」(「石評梅作品集(詩歌小説)」15頁)。
- 36) 黄蘆隱「略伝」。
- 37) 《晨報副鐫》1923年10月7日の連載最終回の「評梅附識」の日付は「9月3日」であり,連載開始前日の9月3日に全文を完成させていたことがわかる。
- 38) 註19に同じ。
- 39) 林砺儒「評梅的一生」。
- 40) 白舒棠「早隕的星——石評梅」;「十位女作家」64頁。
- 41) 陸品清「追記評梅——為「石評梅作品集」出版而作」;「石評梅作品集(詩歌小説)」9, 10頁。
- 42) 汪震「評梅的女子教育」;「石評梅作品集(戲劇游記書信)」296～302頁。
- 43) 黄蘆隱「略伝」。
- 44) 蹇先艾「追憶石評梅師」及び李守儀「回憶敬愛的石評梅老師」;「石評梅作品集(戲劇游記書信)」22頁, 25頁。
- 45) 林砺儒「評梅的一生」。なお,林砺儒は「祭石評梅君文」(「石評梅作品集(戲劇游記書信)」352～354頁)のなかでも同じ嘆きを繰り返している。
- 46) 馬蹄疾「魯迅講演考」(黒龍江人民出版社, 1981年) 19頁。
- 47) 顏一烟「回憶我的好老師石評梅——為「石評梅作品集」出版而作」;「石評梅作品集(戲劇游記書信)」17頁。
- 48) 薛綏之主編「魯迅雜文辭典」(山東教育出版社, 1986年) 228頁。
- 49) 「《婦女周刊》發刊詞」;《婦女周刊》第1期, 1924年12月10日。「石評梅作品集(散文)」

石評梅の生涯—石評梅略伝初稿

179～180頁。

- 50 「致全国姊妹們的第二封信」；《婦女周刊》第11期，1925年2月25日。「石評梅作品集（散文）」193～195頁。
- 51 「総帳」；《婦女周刊》周年紀念特号，1925年12月20日。「石評梅作品集（戲劇游記書信）」138～139頁。
- 52 前掲，陳漱渝「魯迅与女師大学生運動」60頁。
- 53 「兩地書」第一集，一九，1925年5月3日；「魯迅全集」（人民文学出版社，1981年）第11卷，69頁。
- 54 「魯迅日記」1926年8月26日の項に他の12人とともに「……評梅來送」とある。；「魯迅全集」第14卷，613頁。
- 55 「致章廷謙」，1928年10月12日；「魯迅全集」第11卷，637頁。
- 56 許広平，1925年4月30日。「兩地書」第一集，一八；「魯迅全集」第11卷，65頁。
- 57 「同是上帝的兒女」；《婦女周刊》第1期，1924年12月10日。「石評梅作品集（散文）」181～182頁。
- 58 前註34)に同じ。
- 59 陸晶清「追記評梅——為「石評梅作品集」出版而作」；「石評梅作品集（詩歌小説）」10～11頁。
- 60 前註59)に同じ。
- 61 石評梅の李惠年宛て書簡，1925年4月9日，1926年2月25日，1928年4月4日等に拠る。「石評梅作品集（戲劇游記書信）」116～122頁。
- 62 蹇先艾「追憶石評梅師」；「石評梅作品集（戲劇游記書信）」23頁。
- 63 前掲，陳漱渝「魯迅与女師大学生運動」，薛綏之主編「魯迅雜文辭典」等を参照。
- 64 「報告停辦後的女師大——寄翠湖畔的晶清」；「石評梅作品集（散文）」204～205頁。
- 65 事件から一年以上経った後も石評梅が事件について学生に語っていることから、彼女の受けた衝撃のほどが窺える。前掲，顔一烟「回憶我的好老師石評梅——為「石評梅作品集」出版而作」；「石評梅作品集（戲劇游記書信）」13頁。
- 66 「血屍」；「石評梅作品集（散文）」223頁。
- 67 註66)に同じ。
- 68 この点については別稿で改めて論ずるので，これ以上立ち入らない。
- 69 陸晶清「追記評梅——為「石評梅作品集」出版而作」；「石評梅作品集（詩歌小説）」10～11頁。
- 70 楊揚「系念着婦女們和新一代——談石評梅文学活動的一个特点」；「石評梅作品集（戲劇游記書信）」35頁。また，同じ楊揚の「火把燎然 呼聲響深」（《北京女傑》112頁）に拠れば，許地山，胡也頻，徐祖正ら少なからぬ当時の著名作家の作品が《蕪薇周刊》に掲載されたという。なお，《蕪薇周刊》は石の死後も刊行が続けられ，彼女の遺稿が数編掲載された。
- 71 顔一烟「回憶我的好老師石評梅——為「石評梅作品集」出版而作」；「石評梅作品集（戲劇游記書信）」17～21頁。
- 72 瞿冰森「評梅的病」；原載「石評梅女士紀念特刊」（蕪薇社編，1928年12月1日，世界日報社）。「石評梅作品集（戲劇游記書信）」198～263頁。
- 73 潤「殯儀」；原載《北平大学附中校友会会刊・第5期，紀念石評梅先生專頁》。「石評梅作品集（戲劇游記書信）」368頁。
- 74 顔「記石評梅先生追悼會」；原載《北平大学附中校友会会刊・第5期，紀念石評梅先生專頁》。「石評梅作品集（戲劇游記書信）」369～371頁。及び騰朋「傷逝——附中石評梅先生追悼會記——」；「石評梅女士紀念特刊」。「石評梅作品集（戲劇游記書信）」338～342頁。なお，北京師範大学は当時「北平大学第一師範学校」と改称されていた。

石評梅の生涯—石評梅略伝初稿

- (75) 世荃(筆記)「石評梅女士追悼会紀詳」;原載「石評梅女士紀念特刊」。「石評梅作品集(戲劇游記書信)」343~350頁。
- (76) 姜德明「一个被遺忘了的女作家」;《新文學論叢》1981年第1期,211頁。
- (77) 陸品清「追記評梅——為「石評梅作品集」出版而作」;「石評梅作品集(詩歌小說)」10~11頁。

石評梅關係資料

- 姜德明 「一个被遺忘了的女作家」;《新文學論叢》1981年第1期(總7期)
人民文學出版社,1981年7月
〔のちに姜德明「書邊草」(浙江人民出版社,1982年)に収録。〕
- 白舒榮 「早隕の星——記石評梅」;《新文學史料》1981年第4期(總13期)
人民文學出版社,1981年11月
〔のちに「早隕の星——石評梅」として,「十位女作家」(群眾出版社,1986年)に収録。〕
- 張恒壽 「二十年代山西的一位女作家——紀念高君宇的戰友石評梅同志」(未見)
《山西師院學報》1981年第2期
- 梁楓・永貴 「閃光的脚印——寫在高君宇和石評梅“驚鴻塚”前」(未見)
《太原文芸》1981年第4期
- 楊揚 「探求光明的心声——略論石評梅的散文」
楊揚編「石評梅作品集(散文)」(書目文獻出版社,1983年8月)
- 楊揚 「她的心,為英雄呼喊!——談石評梅幾首詩作的意義」
楊揚編「石評梅作品集(詩歌小說)」(書目文獻出版社,1984年2月)
- 楊揚 「系念着婦女們和新一代——談石評梅文學活動的一个特点」
楊揚編「石評梅作品集(戲劇游記書信)」(書目文獻出版社,1985年2月)
- 楊揚 「火把燎然 呼聲響深——女作家石評梅傳略」
北京市婦女聯合會編「北京女傑」(北京出版社,1985年2月初版,9月再版)
- 陸品清 「追記評梅——為「石評梅作品集」出版而作」
《新文學史料》1983年第2期(總19期),人民文學出版社,1983年5月
〔のちに「石評梅作品集(詩歌小說)」に収録。〕
- 王慶華 「五四時期的青年女流作家石評梅」(未見) 《文化史料》叢刊,1983年第4輯
- 董大中 「斷腸人寫斷腸詩——詠石評梅的『掃墓』詩」(未見)
《名作欣賞》叢刊,1983年第4期
- 尤敏・屈毓秀 「海之濤 心之聲——石評梅的『濤語』及其他」(未見)
《名作欣賞》叢刊,1983年第4期
- 屈毓秀・尤敏 「山城風情入画屏——石評梅筆下的平定」(未見)
《山西文學》,1984年第7期
- 林友光 「血性文章血写成——詠女作家石評梅的幾篇文章」(未見)
《夜讀》(太原),1984年第2期
- 徐士瑚 「石評梅與高君宇」(未見) 《山西大學學報》,1985年第3期
- 王稼句 「石評梅的散文集」(未見) 《深圳特區報》,1985年第8、11期
- 張以英・諸天寅・完顏戎 「石評梅 愛和愁的交響曲」
張以英・諸天寅・完顏戎「中國現代散文一百二十家札記」上
(瀋江出版社,1987年5月)

石評梅の生涯—石評梅略伝初稿

秋平（縮写）「西山紅葉寄深情——高君宇与石評梅的愛情故事」

原載〈福建青年〉1984年6期；王正年編『当代名人愛情珍聞録』
（中国婦女出版社、1987年4月）

艾春・周忠麟・丁言昭編 「高君宇致石評梅」

艾春・周忠麟・丁言昭編『写給愛人的信——中国現代作家家書集』
（山西出版社、1987年9月）

以上のほかにも、本稿において引用したものも含めて、石評梅に関する回憶が『石評梅作品集』に少なからず取められている。